『西南アジア研究』No. 31, 1989

Tolkāppiyam の成立について
—タミル最古の文典の年代論—

高 橋 孝 信

はじめに

Tolkāppiyam[1)]（「トルハーッピヤム」と読む。以下 *Tol.* と略記）は，タミル文学史上現存する最古の文典で，その優れた内容により，タミル文学史を通じて常に絶大な権威を持ってきた。

今日われわれに伝わる *Tol.* のテキストは[2)]，3章（atikāram＜Skt. adhikāra）[3)] 27節か

1） この書名の作者は Tolkāppiyar（Tolkāppiyaṉār）として知られる。伝説によると彼は，タミルの学問・芸術の祖 Akattiyar（Skt. Agastyal）の12弟子の一人とされる。インドの学者は，*Tolkāppiyam* という書名はこの作者の名に由来するとし，tol は「古い（cf. *DEDR* 3516）」，kāppiya- は作者の出身地（ゴートラ名という説もある）であるとする。それに対し西洋の研究者は「古い kāppiyam（＜Skt. kāvya）［に関する書］」と捉えている（この書名については，稿を改めて論ずる予定である）。なお *Tolkāppiyam* にはっきりと言及している最も古いものは，*Iṟaiyaṉār Akapporuḷ*（シヴア神［Iṟaiyaṉ］に帰せられる5－6世紀ごろの恋愛文学理論書，別名 *Kaḷaviyal*）に対する注釈（伝 Nakkirar 作，8世紀？）である。

2） *Tol.* が今日のような形で一般に知られるようになるのは，それほど古くはなく前世紀後半のことである。1865年に出版された Murdoch のカタログでは，*Tol.* は1276のスートラ（注4参照）からなると書かれているから［Murdoch：210］，そのころ一般に流布していた *Tol.* が今日のもの（約1600スートラからなる）とは異なるものであることが分かる（筆者は Murdoch の言及する版を見ていない）。*Tol.* の近代的校訂版も，サンガム文学のテキスト同様に前世紀後半から今世紀初頭にかけての，いわゆる「再発見」の時期に出版されたのである。なおその時期に，*Tol.* を初めとした文法書の発見，出版に功績があったのが S.V. Damodaram Pillai（1832-1901），文学書の発見，出版に功績があったのが U.V.Swaminatha Aiyar（1855-1942）である。

3） *Iṟaiyaṉār Akapporuḷ* 56に対する，Nakkirar の注釈では，*Tolkāppiyam* の各章を言い表すのにサ

表1　*Tolkāppiyam* の内容

Ⅰ. *Eluttatikāram* 「音韻論」	
1. *Nūṉmarapu*	文字について(文字の種類, 子音表示記号など)
2. *Moḻimarapu*	単語について
3. *Piṟappiyal*	調音について
4. *Puṇariyal*	内連声について
5. *Tokaimarapu*	外連声について
6. *Urupiyal*	曲用[の連声]について(格語尾と接辞の連声)
7. *Uyirmayaṅkiyal*	母音終わりの語の[連声の]諸規則
8. *Pullimayaṅkiyal*	子音終わりの語の[連の]諸規則
9. *Kuṟṟiyalukarappuṇariyal*	超短母音 ŭ の連声に関する規則
Ⅱ. *Collatikāram* 「形態論」	
1. *Kiḷaviyākkam*	人称・性・数の一致
2. *Vēṟṟumaiyiyal*	格の用法
3. *Vēṟṟumaimayaṅkiyal*	格の本来的用法以外の用法
4. *Viḷimarapu*	呼格について
5. *Perariyal*	名詞について
6. *Viṉaiyiyal*	動詞について
7. *Iṭaiyiyal*	各種の接辞について
8. *Uriyiyal*	限定詞について
9. *Eccayiyal*	[以上の]補足事項
Ⅲ. *Porulatikāram* 「詩論」	
1. *Akattiṉaiyiyal*	恋愛((*akam*)文学の主題について
2. *Puṟattiṉaiyiyal*	英雄(*puṟam*)文学の主題について
3. *Kaḷaviyal*	結婚前の秘密の恋(*kaḷavu*)の主題について
4. *Kaṟpiyal*	結婚後の愛(*kaṟpu*)の主題について
5. *Poruliyal*	恋愛文学の主題に関する補足事項
6. *Meyppāṭṭiyal*	感情の発現について
7. *Uvamaiyiyal*	比喩(*uvamai*<Skt. *upamā*)法について
8. *Ceyyuliyal*	作詩法について
9. *Marapiyal*	慣用語法について

らなり(表1参照), 全体では様々な長さのおよそ1600の「規定」(以下「スートラ」と呼

ンスクリット語起源の atikāram を用いずに, タミル語の pāl(「部分」, *DEDR* 4097参照のこと)を用いている。このことは, *Tolkāppiyam* の各章を現すのに古くは pāl が用いられていたのが, 後にサンスクリット文化の流入にともない, atikāram が用いられるようになったことを示唆する。

ぶ)[4] をその中に含んでいる。第1章 *Eḻuttatikāram*(「文字(eḻuttu)に関する章」)では,音声論,音韻論,書記素論などを扱い,第2章 *Collatikāram*(「語彙(col)に関する章」)では,語源論,形態論,意味論,統語法などを,最後の第3章 *Poruṭatikāram* では,詩の主題,比喩法,修辞論などを扱っている[5]。

この内容からも知られる通り,*Tol.* はタミル古典学にとって欠くことの出来ない書である[6]。他方 *Tol.* は,古代タミル社会の文化,習俗,宗教などにも言及しているから,文化史,宗教史というような観点からも重要な資料である。しかもそこに描かれたタミル社会には,純枠にタミル的(ドラヴィダ的)な要素のみならず,ある程度はアーリア的な要素も認められるから,古代タミル社会と北インド文化との関係という点からも,*Tol.* は興味深い書である。

---

4) *Tol.* は,タミル古典期の代表的な韻律,アハヴァル(akaval, āciriyam とも呼ばれる)に似たヌールパー(nūṟpā)という韻律で書かれている。この「学術的な作品に適した詩節」(nūṟpā<nūl "yarn, cotton, thread, string, systematic treatise, science" [*DEDR* 3726] + pā "verse, stanza, poem" [*DEDR* 4065])という意味を持つヌールパーは,機能的にいってサンスクリット語のスートラ(sūtra,「糸」,「本,ことに規範書」)と同義である。このように「規定」を表すのに,タミル語に古くから存在する単語があるにもかかわらず,本論でサンスクリット語のスートラという語を用いるのは,スートラが汎インド的な用語としてよく知られているからである。なお sūtra のタミル語化された cūttiram という語は,タミル人の間でもよく知られている。*Tol.* のスートラの区切り方は,注釈家によって多少異なる。*Tol.* に諸本があってそのような違いが生じた可能性もあるが,彼らが自分の解釈に合うようにスートラを区切り直したと思われる例も少なからず存在する。スートラの番号が元々付いていたのか,あるいはいつの頃からか付けられるようになったのかは,明らかではない。現在の *Tol.* のテキストの中で最も短いスートラは1行(*Tol. Eḻuttu.* 5など多数),最大のものは59行(*TP* 144)である。

5) 後世「文法書」は,これら eḻuttu, col, poruṭ に yāppu(韻律学), aṇi(修辞学)の2つを加えた5つの支分からなる,と言われるようになる。*Tol.* は名目的には最初の3つしか含んでいないが,実際には第3章の第8節などで「韻律学」や「修辞学」を扱っている。

6) タミル語では,文法,文学を各々 ilakkaṇam(<Skt. lakṣaṇa-「示す(もの)」)ilakkiyam(<Skt. lakṣya-「示される(もの)」)と呼ぶ。このことからも知られるように,タミル文化には文学は文法の規範にしたがって創られる,という伝統的な考え方がある。つまり,*Tol.* はサンガム文学に先立って書かれ,サンガム文学に対する「規範書」であった,というのが伝統的な考え方である。注7)参照。

このような *Tol.* の年代を知ることの重要性については論を待たないであろう。ところがこれまでにも数々の年代論が出されたにもかかわらず，その主張する年代は様々で，紀元前5320年[7] から紀元後 8 世紀というように大きなばらつきが認められる[8]。このように様々な年代論があること自体，*Tol.* の年代決定に決め手が無いことを示しているが，一方では *Tol.* あるいは他の資料が，*Tol.* の年代を示唆する手がかりをかなり含んでいるのも事実である。

さて，それら *Tol.* の年代を探る手がかりは次のような方法で得られる。

(1)タミル・ブラーフミー刻文の言語と *Tol.* に記述された言語との比較

(2)タミル古典文学(サンガム文学)の言語と *Tol.* の言語記述との比較

(3)*Tol.* に記述された詩論とサンガム文学の実際の姿との比較

(4)サンスクリット文献の記述と *Tol.* の記述との比較

ところが *Tol.* は大著(しかもかなり難解な書)であるし，サンガム文学も 3 行から最高782行の，約2300の詩からなる大文献群であるから，それら全てを詳しく検討し，両者の記述の比較を行うのは，それだけで容易なことではない。

そこでいきおい論者は，*Tol.* の年代の手がかりを *Tol.* のあちこちに求め，それを恣意的に拾い出して，結論を導き出すことになる。その場合，取り出された部分と，*Tol.* の全体との関係が問題になる。例えば *TP* 410以下では，古典期(紀元後 1 - 3 世紀)の韻律のみならず，より後代(5 世紀以降)の韻律にも言及している。もしもその *TP* 410以下の部分を後世の付加とするならば，*Tol.* にはそのような後の付加を除いた，より古い「原テキスト」と言うべきものがあることになるし，それが後の付加でないとするならば，*Tol.* の成立そのものが 5 - 6 世紀以降ということにもなる[9]。

---

7) 伝説によると，*Tol.* は古代パーンディア王朝の首府にあったとされる「文芸院」(サンガム，Caṅkam)において，文学創作上の「規範書」として認められていたという。その伝説に従うと，*Tol.* は紀元前 5 千年以前にはすでに存在していたことになる。この伝説は「サンガム伝説」と呼ばれるもので，*Iṟaiyaṉār Akapporuḷ* 1 に対する注釈に詳述される。Nakkirar に帰せられるその注釈の信憑性や，サンガム伝説の内容の詳細については，Aravamuthan 1930 や Zvelebil 1973b を参照のこと。

8) 詳しくは Zvelebil 1975：69 を参照のこと。

9) 前者のような考え方に立つものに Ilakkuvanar [1963：15ff. など] がおり，後者に Vaiyapuri Pillai [1956：62-72] がいる。

このように,上に述べた方法(1～4)などから得た手がかりをもとに *Tol.* の年代を決める場合に,まず *Tol.* が一人の作者によって書かれたものなのか,あるいは複数の手になるものなのか,というような考察が必要である。しかし,これまでの年代論ではそのような議論はほとんどなされていない[10]。

次にサンガム文学は,後世(5-6世紀)の成立であると思われる一部の作品を除外しても,1世紀から3世紀の間という長い期間にわたって作られたものである。従ってその期間に語形,文法構造,文学上の約束事などの変化があった可能性もある。しかし従来の年代論ではその可能性を考慮せず,例えば *Tol.* の述べる語形よりも新しい語形をサンガム文献中のある文献に見つけると,*Tol.* の成立が全サンガム文献よりも古いと短絡する傾向がある(具体的には,以下の「Ⅰ-2.タミル古典文学(サンガム文学)の言語と *Tol.* の言語記述との比較」の項で触れる)。

そこで本稿では,まず従来の年代論の欠陥を指摘しながら,それらを見直してみる(第Ⅰ章)。次に,「原テキスト+後の付加」という構成よりさらに複雑な構成,すなわち「複数の作者の手になる複数の層」という構成からなる可能性のある *Tol.* の第3章(*TP*)の成立課程に議論の焦点を当てて,*Tol.* の年代について論じてみたい(第Ⅱ章)。

Ⅰ-1. タミル・ブラーフミー刻文の言語と *Tol.* に記述された言語との比較

タミル・ブラーフミー刻文は,これまでに21の遺跡からあわせて76見つかっている。その言語は,かなりプラークリットの混じったタミル語であるというような議論も当初はあったが,後に Mahadevan が拓本そのものからその言語を子細に検討した結果,純粋なタミル語であることが判明し,その言語の種類に関する議論に終止符を打った(なお,タ

10) Ilakkuvanar や Vaiyapuri の考え方は,基本的には(後の付加を認めるとしても)*Tol.* が一人の作者によって書かれたという点では変りが無い。一方 *Tol.* は一人の作者によって書かれたものではないという議論もある。Marr は *TP* の第6,第7節は後世の成立であると言い[Marr 1985:15],Zvalebil は具体的な成立過程に言及はしないものの *Tol.* は段階的に成立したという[Zvelebil 1973a:138-149]。Gros[1975:169-170]や Hart[1975:10]は,現在のテキストに複数の手が加わっている可能性自体は否定しないが,新しい部分と「原テキスト」とを区別することは出来ないとしている。

ミル・ブラーフミーという名称も彼が命名したものである)[Mahadevan 1971]。またその内容は,寄進の内容を短く記したもの,それらの刻まれた洞穴の占有者を示したものなどである[Nilakanta Sastri 1957：500]。そしてこれらの刻文は,紀元前2世紀から紀元後3世紀の間に刻まれたものと考えられている。さてその刻文の言語であるが,「簡明な分かり易いタミル語」[Mahadevan 1971：93]であるから,*Tol. Eḻuttu.* や *Tol. Col.* に記述された言語,すなわち洗練された文語とは,スタイルの上で差がみられる。しかし「[タミル・ブラーフミー刻文の]言語の基本をなすもの(すなわち音韻,形態,あるいは語彙など)は,サンガム時代のタミル語(すなわち *Tol.* の記述する言語,筆者)と,そんなには変わらない」(ibid.)。従って,まず刻文資料との比較から,*Tol.* の著された年代が,それら刻文の年代と大幅に異なることはないと言えよう。

さらに,Mahadevan はタミル語の表記に関して,興味深い指摘をしている。彼によると,タミル子音文字の上に付けて,母音-a を含まぬ,子音のみを表す点 puḷḷi(サンスクリットの virāma のようなもの)は,最古層のタミル・ブラーフミー刻文(紀元前2世紀-紀元後1世紀)には用いられていないが紀元2世紀以降の刻文には用いられている,一方 *Tol.* はこの puḷḷi を用いた表記法にかなり親しんでいる様子を示している(*Tol. Eḻuttu.* 14,15,16など多くのスートラで puḷḷi について述べる,筆者)このことは,*Tol.* の年代を考える上で示唆に富んでいる,というのである[Mahadevan 1970：6-7]。

しかしこの Mahadevan の指摘から,直ちに *Tol.* の年代[の上限]を,puḷḷi が刻文に現れる2世紀ごろ,とするのは早計であろう。まず第一に puḷḷi が使用されている刻文の年代が,2世紀を中心に前後数十年も動かせないほど確かなものではないであろう。次に *Tol.* の記述は,おもに当時の知的エリート(cāṉṟōr)を対象にしているのに対して,刻文の書き手は必ずしも知的エリートではないであろうから,puḷḷi を用いた表記法が仮に正しい表記法であったとしても,刻文の書き手がそれらを無視していた,あるいは彼らに浸透するのが遅かった,ということも十分にありうるからである。

従って,刻文資料と *Tol.* との比較,ことに両者における puḷḷi の普及ということからすれば,*Tol.* (より正確には,*Tol. Eḻuttu.*)の成立は,Mahadevan の言う紀元2世紀に前後1世紀を加えた,1世紀から3世紀の間のいつか,としてよいであろう。

I-2.　タミル古典文学(サンガム文学)の言語と *Tol.* の言語記述との比較

Tol. に記述された言語と,サンガム文学に実際に現れた言語とに差異が見られること

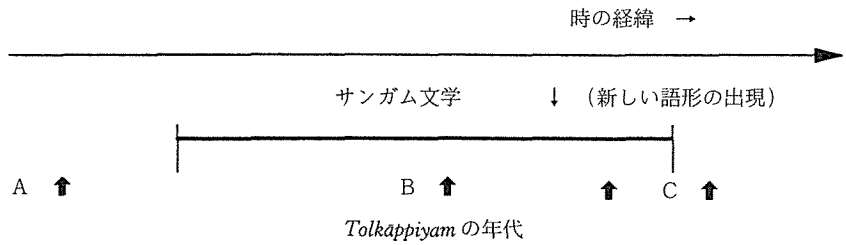
については，これまで多くの論者が指摘してきた[11]。

例えば，「汗」を表すのに *Tol.* では viyar(*Tol. Col.* 364)しか用いていないのに，サンガム文学では viyar(e.g. *Akanāṉūṟu* 17)以外にも，新しい形 vēr(*Porunarāṟṟuppaṭai* 80)，を用いているし，「川」を表すのに *Tol.* が yāṟu(*TP* 189)を用いているのに，文学にはそれ以外にも新しい形 āṟu(e.g. *Neṭunalvāṭai* 30)が見られる。また *Tol. Col.* 203は，1人称単数の定動詞に用いられる接辞として eṉ, ēṉ, al, ku, ṭu, tu, ṟu を挙げるが，tu, ṟu を用いている例はサンガム文学には(およびそれ以降の文学にも)無い[Natarajan 1977：133]。

多くの論者は両者のこれらの違いを，*Tol.* が記述の対象とした言語(サンガム時代以前の言語)から，サンガム文学にいたる間に変化が起こったため，と考えている。例えば Jesudasan は，「文学は[文典の記述にない]独自の用例を付け加えることはできるが，その反対(文典が実際の文学に無い用例を勝手に書き加えること，筆者)は有り得ない」，従って「これらの違いが，文典が時間的に文学に先行することを示すのは確かなことである」と言う[Jesudasan 1961：3-4]。

しかし，*Tol.* の記述とサンガム文学における実際の例との違いを，*Tol.* がサンガム文献群に先立って著されていた(*Tol.* は図1のAの位置に来る)ということに結び付けるのは，些か早計に過ぎるように思われる。というのもサンガム文学というのは一大文献群で

〈図1〉



あって，決して短期間の内に作られたものではない。後代の成立と思われる作品(*Kalittokai, Paripāṭal, Tirumurukāṟṟuppaṭai*)を除いても，その作品群は紀元1世紀から3世紀の間の3-5世代(約150年)にわたって作られたものである。そこでその間にも語形，意味，文法などの変化は多少とも存在した可能性は当然考えられる。

---

11) 例えば Jesudasan [1961：3-4], Meenakshisundaran [1965：51 ff.], Zvelebil [1973a：141 ff.]など。

その可能性を考慮に入れると，例えば *Tol.* が記述の対象とした言語が，サンガム時代以前の言語およびサンガム文学の初期の言語である場合(図1のB)でも，*Tol.* の記述と異なる実例は存在することになる。また仮に新しい形(例えば「川」を表す āṟu)が実際には用いられていても，*Tol.* の作者が(文法家であるから)あえて古い形(yāṟu)にこだわり，それを記述したということも十分考えられる(図1のC)。

すなわち *Tol.* の言語記述とサンガム文学の実例との違いということから導き出せる結論は，*Tol.* の年代とサンガムの年代とはそう大きく変わらないということであって，*Tol.* とサンガム文献群との前後関係までは言えない，ということである。

この結論は，この種の研究では最も網羅的な研究成果によっても裏付けられる。Natarajan は，*Tol. Eḻuttu.* および *Tol. Col.* に述べられた規則の各々を(全てではない)，サンガム文学の言語と比較し，その結果を次のように分類する。

(a) *Tol.* の記述以外の例が見出せるもの：39項目(例，*Tol.* は語頭の c-の後には a, i, u, e, o だけが来ると言うが，実際の文学テキストではそれら以外にも a, ai も来る。

(b) *Tol.* の規則の実例がサンガム文学のテキストに見出せないもの：36項目

(c) *Tol.* は言及しないが，実際の作品にはあるもの：12項目

そして，このような豊富な成果を踏まえた上での結論は，例えば「サンガム文学の言語は，ある特定時期に属すると言うようなものではなく，少なくとも数百年にまたがるものである」とか，「サンガム文学の作品の中には，*Tolkāppiyam* と同時代のものもあるであろうし，またそれよりも以前のもの，あるいはまたそれ以後のものもあるであろう」というように，より慎重である[Natarajan 1977：259-270]。

以上から，*Tol.* の年代を(より正確には *Tol. Eḻuttu.* と *Tol. Col.* との年代を)サンガム文学の主要部分の年代，紀元1-3世紀に，前後1世紀を加えた範囲のいつか，と捉えて間違い無いと言えよう。

I-3.　*Tol.* に記述された詩論とサンガム文学の実際の姿との比較

この種の研究は，これまでほとんどなされていない。確かに中世の注釈家以来，*Tol.* の詩論に関する諸規則と，サンガム文学における実際の扱いとの関係について論じられてきた。しかし従来のやり方は，詩論と実際の文学との「比較」ではなく，「協調」とも言うべきものである。つまり *Tol.* のある規定を説明するためにそれの例証となる(すなわちその規定に都合のよい)作品を引く，というやり方である。

上のⅠ-2.のような,言語に関する *Tol.* と文学との比較はたやすい。というのも,*Tol.* の言語に関する記述の多くは理解し易いし,一方の文学の方でも実例を見つけるのは(例えば,1人称単数の定動詞に,接辞 ṟu が用いられる例があるかどうか見つける)たやすいからである。ところが,*Tol.* の詩論部分(すなわち *TP*)には,解釈が多様に分かれるようなスートラ,あるいは文脈的に問題があって意味が曖昧なまま残るスートラが多数存在する。一方サンガム文学の作品の中にも,主題が様々にとれる作品が多い。従って,例えば *TP* 105の場合,12世紀の注釈家 Iḷampūraṇar は「男が語る場合を列挙したもの」[12] と解釈し,14世紀の Naccinārkkiṉiyar は「女の語る場合」と取り,各々自説に都合のよい作品を引いている。しかしこの場合,両者のいずれの解釈が正しいのか判定しがたい。と言うのも彼らの引く作品もまた多様な解釈を許し,それぞれの解釈の「実例」とはなっていないからである。

このような伝統的な比較の仕方に縛られず,筆者は *Tol.* の詩論と実際の文学との関係とを探ってみたことがある。具体的には,*TP* およびサンガム文学の各々でどのように恋愛文学の諸テーマが扱われているかを真の意味で「対比」したのであるが,ここでその結果のみを略述すると,1)*Tol.* の述べるテーマの実例が見出せないもの:27.5%,2)*Tol.* の述べるのとは違うように文学では描かれているテーマ:5%,3)*Tol.* の述べるのと同じように実際の作品でも描かれているテーマ:67.5%,となる[Takahashi 1989]。

この結果のみから,*Tol.* とサンガム文献群との比較年代に関して結論を導き出すことはできないが,他の諸々の状況を考慮に入れると,両者の年代がきわめて近い,というより *Tol.*(正確には,恋愛文学のテーマを詳述する *TP* の1,3,4,5節)の成立はサンガム文学の中心部分と同じかやや遅い頃,すなわち2-4世紀ごろ,と言えるであろう。

Ⅰ-4. サンスクリット文献の記述と *Tol.* の記述との比較

サンスクリット文献の記述と *Tol.* の記述との類似性は,大部分が *Tol.* の第3章 *TP* に

---

12) 英雄文学では,詩人が自分の言葉として王や族長の偉業を称える。一方恋愛文学では,登場する人物が決まっていて,その内の誰が誰にどのような状況で語るかも様式化している。詩人はその登場人物の誰かの口を借りて語る形式を取る。登場人物の主なものは,主人公の男および女,その女の友人などである。詩の中での話者を kūṟṟu,対話の相手を kēṭpōr という。恋愛文学における話者,対話者,および様式化された状況などについては,高橋 1984 参照のこと。

見出される。例えば,

- 文学上の約束事と現実とを区別して言う, *Nāṭyaśāstra* Ⅵ-24の nāṭya-dharmi と loka-dharmi という言い方と, *TP* 56における nāṭaka-vaḻakku と ulakiya-vaḻakku との類似性
- 恋愛における, 10の「状態(avasthā)」を述べる *Kāmasūtra* Ⅴ-1と *TP* 97(但し *TP* ではその内の9つのみ)との類似性
- 女の「自然の時期(Skt-ṛtu)」をめぐる, *TP* 185の記述と *Mānavadharmaśāstra* Ⅲ-46, 47との類似性
- *TP* 247の8種の「情諸(meypāṭu)」と, *Nāṭyaśāstra* Ⅵ-15の8種の rasa との関係
- *Arthaśāstra* XV.1.3. の述べる理論書にみられる32種の「方法(yukti)」と *TP* 656で言及する, それら32種の方法(utti)

などである。タミル人学者の中には, *Tol.* とサンスクリット文献にみられる類似性を, 例えばタミルの meypāṭu 理論がサンスクリットの rasa 論に影響を与えたというように, 前者が後者に影響を与えたと主張する者もいるが, これまでみたような *Tol.* の年代論も考慮に入れると, サンスクリット文化の影響が *Tol.* にあったと考えざるを得ない。

ある論者達は, これらのサンスクリット文献の年代から *Tol.* の年代を探ろうとした[Vaiyapuri Pillai 1956：14, 68-70 ; Zvelebil 1973a：144-145]。しかしながらそれらの作品, *Arthaśāstra, Mānavadharmaśāstra, Nāṭyaśāstra, Kāmasūtra* の年代は, *Tol.* の年代同様, あるいはそれ以上にはっきりしたことは分からないのであるから, それらサンスクリットの作品から *Tol.* の成立年代を特定することには無理がある。ただ, それらの作品の年代論を総合的に捉えると, 一部の論者が主張するような, *Tol.* に関する極端に古い年代論(例えば紀元前4世紀以前というような年代論)は正しくないことが分かるし, 他方, *Tol.* (より正確には *TP*)の成立が, それらサンスクリット諸作品の年代論の下限である, 紀元4世紀以降という可能性も十分にあると言わざるを得ない。

Ⅱ. *Tol.* 第3章(*TP*)の構成およびその成立過程

これまで, 議論が複雑になるのを避けるために, *Tol.* に含まれた成立が新しいと思われるスートラの意味を考慮せずに, 年代論を展開してきた。ここではそれらが *Tol.* というテキストの中で, どのような意味を持っているのかを考えてみたい。

Tol. の中には明らかに時代が降ると思われるスートラ(例えば, 5世紀頃の作品から用

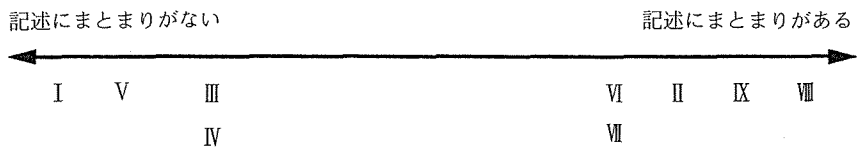
いられるようになる韻律に言及する *TP* 56とか *TP* 410以下のスートラ)や,サンスクリット文化の影響の濃いスートラ(時代が降るほどタミル文化におけるサンスクリット文化の影響は大きくなる),さらに前後の文脈からして落ち着きの悪い様なスートラが,少なからずある。

その様なスートラに関しては,これまで次のような2つの解釈がある。まず,それらが後世の付加であり,それらを除いたテキストは古い成立であるという解釈。もう一つは,それらは他のスートラ同様,*Tol.* の真の部分であるという解釈で,その場合それらは *Tol.* の新しさを示す例とみなされる。

しかしこれらの解釈では,それら時代が降ると思われるスートラが *Tol.* の第3章に集中していることや,後述するように,それらが *TP* のあちこちに均等に散らばっているのではなく,*TP* のある節には多くまたある節では少ないということが何を意味しているのかを考慮していない。

まず,あるスートラが後から挿入されたかどうかの有力な手がかりとなる,文脈の乱れという観点から *TP* の全体を見てみると,ある節では全体の構成がきちっとしていて,記述にもまとまりがあるのに,別の節から構成も記述の仕方も悪いということが分かる。それを節毎にみると〈図2〉の示すような結果となる。

〈図2〉



(注 ローマ数字は *TP* 各節の番号)

例えば,第8節 *Ceyyuḷiyal* では,はじめのスートラでそこで述べる34の項目を列挙し,以下およそ230のスートラでそれら34項目を順次述べて行く。一方第1節 *Akattiṇaiyiyal* には,58(Naccinārkkiniyar の分け方によると55)のスートラしかないにもかかわらず,それらの相当数のスートラは前後からその内容を推測することすら難しいくらい,文脈的な混乱がみられる。

このような記述のまとまりのなさは,何に起因するのであろうか。Chelvanayakam は

「第1節 *Akattiṇaiyiyal* がまったくまとまりに欠けるのは，作者の責任ではない。と言うのも冒頭にあったと思われるいくつかのスートラは，[後に失われ中世の]注釈者が *Tol.* を手にしたときにはすでに失われていたと思われるし，[現在ある]はじめのスートラのいくつかは，作者が書いたのとは順序が変わっているようである。このスートラの順序の入れ替えはおそらく，後に貝葉写本を誰かが誤って取り扱ったために起こったのであろう」と言う[Chelvanayakam 1969：43]。

確かに彼の指摘するように，スートラが失われたり後代の人の不注意からスートラの入れ替えも起こったであろう。しかしながら，もしも記述のまとまりのなさということの原因を，後にスートラが紛失したり入れ替えがあったためとするなら，何故ある節(例えば第1節や第5節[13])では紛失や入れ替えが頻繁に起こり，別の節(例えば第8節)ではそれらがほとんど起こらなかったのか，という疑問が起こる。

この疑問に答えるための考え方としては，2つあるだろう。ひとつは一人の作者によって全体が書かれたが，その作者の得手不得手によってはじめから内容にばらつきがあった，とい考え方である。確かに *Eḷuttu.* や *Col.* を著した作者であれば，恋愛文学の主題を扱うより(第1，3，4，5節)，韻律(第8節)や比喩法(第7節)の方が扱い易かったであろう。しかしもしそうであるなら，古典文学のもう一つのジャンル，英雄文学の主題を扱った第2節が，非常に体系的に整然と述べられていることの説明が出来なくなる。というのも英雄文学の主題をこれほど整然と述べられる作者なら，恋愛文学の主題ももう少し整然と述べられたはずだからである。

そこで第2の考え方であるが，作者は一人ではないとしてみる。一般的には，スートラの紛失も入れ替えも古いテキストほどよく起こるから，全体の構成がきちっとしていない，まとまりのない節ほど古いと仮定することが出来るであろう(第8節のように全体の構成が緻密で内容がはっきりしていれば，スートラの入れ替えも挿入もそもそも余り起こり得ない)。

TP が複数の作者の手になって，段階的に(まとまりの悪い節→まとまりのよい節)成立したという考え方は，他の情況によっても支持される。まず，*TP* の中に混入するサンスクリット的な要素の度合が節によって異なるのだが，その割合はまとまりのよい節に多くみられる。例えば，8種の「感情」およびそれらを喚起する「誘因」などについて述べた

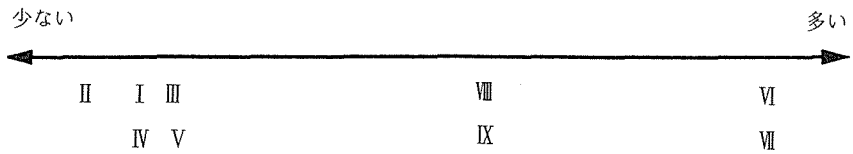
---

13) 第5節が構成的に甚だまとまりに欠けるのは，その節のスートラが1，3，4の各節の補足事項を扱ったものだからである。

第6章は,個々の述語こそタミル語に意訳しているが(例, hāsya「笑い」をタミル語のnakai, *DEDR* 3569を参照のこと),全体としてサンスクリットのラサ理論を借用しているのは明らかであるし,比喩法について述べた第7章では,述語(Skt. upamā>Ta. uvamai/uvamam)すらサンスクリットから借用するという有様である。そのような各節におけるサンスクリット文化の影響の大きさの違いを図示したのが〈図3〉である。

〈図3〉

サンスクリット文化の要素



(注 ローマ数字は *TP* 各節の番号)

この図と図2とを重ねると,第2節を除いては(これについては後述),まとまりのよい節にサンスクリット文化の影響が多く認められるということが分かる。タミル文化に対するサンスクリット文化の影響は時代が下るほど大きくなるから,この点でも構成的にきちっとしている節(6,7,8,9)がその他の節(1,3,4,5)より後代に成立したことが分かるであろう。

また古いと思われる節にもサンスクリット文化の影響がみられるスートラが存在する。その影響が確かであると思われるスートラだけでも,第1節(*TP* 1-58)では *TP* 5や56,第3節(*TP* 89-139)では *TP* 89,91,97など,第4節(*TP* 140-192)では *TP* 140-143, *TP* 185などが挙げられる。これらサンスクリットの影響の濃い,すなわち新しいと思われるスートラを注意してみると,各節の冒頭あるいは最後に近い部分に現れていることがわかる。そのような場所というのは,後から手を入れるのに最も好都合であるし,また節と節との繋りをよくする上でも効果的な場所である。従って,後の誰か(おそらく最終的に *Tol.* を編纂した人)が手を入れたと考えて間違い無いであろう。

さて,*TP* の第2節 *Puṟattiṇaiyiyal* は,記述にまとまりがあるにもかかわらず(我々の仮説では成立の新しさを示す),*TP* の新しい部分に特徴的なサンスクリット的な要素の混入はほとんど見られない。このことはどう解釈したらよいのであろうか。

第2節は,恋愛文学の主題を扱う前後の第1,3,4,5節に囲まれた形で英雄文学の主題を扱っている。タミル古典文学は恋愛文学と英雄文学という二つのジャンルからなるから,恋愛文学を総説する第1節の後を受けて,第2節で英雄文学を総合的に記述するのは構成的には妥当である[14]。しかし後続する全ての節で,まったくと言っていいほど英雄文学に触れないのは不思議である。

まず,第1節から第4節までの補足事項を述べている第5節 *Poruliyal* で,英雄文学についてまったく触れていない。さらに,文学における「感情」を論ずる第6節でも,それを恋愛文学あるいはその登場人物と関係付けて論じるのみで,英雄文学における「感情」論は展開しない。第7,9節でも事情は同じである。

さらに,作詩法全般にわたって詳しく論ずる第8節ですら,英雄文学の作詩法には触れていない。第8節は,最初のスートラ(*Ceyyuliyal* 1 または *TP* 310)で34の「詩の支分」を列挙し,以下230を越えるスートラでそれら34の支分を順次論じて行く。初めの12支分は韻律に関するもので[15],次の12は詩の内容を構成する項目である。

この詩の内容に関する12項目は,表面的には恋愛文学に関する項目のようであるが英雄文学にも共通している,というのが中世の注釈者以来の伝統的な考え方である。それら12項目の中でもことに重要な初めの4項目(tiṇai, kaḷavu, kaṟpu, kaikōḷ)に付いて,その伝統的な解釈が成り立つかどうか見てみよう。その12項目に関する一群のスートラは,「[tiṇai については] kaikkiḷai から始まる7つの tiṇai について,すでに(第1節, *TP* 1[16])述べられた」という *TP* 486から始まり,次のように続く。

TP 487:kaḷavu(結婚前の愛)を構成する4つの主要テーマ

---

14) 恋愛文学および英雄文学は各々7つのジャンル(tiṇai)からなるが,第2節では英雄文学の7つのジャンルを,例えば「veṭci(牛の略奪)[というジャンル]は,英雄文学においては[恋愛文学の]kuṟiñci(出会い・逢引)に相当する」(*TP* 59)というように,第1節に挙げられた恋愛文学のジャンルと関連づけるようにして述べるから,第2節が第1節の後を受けて書かれたのは確かである。なお各々の7つのジャンルについては 高橋 1984 を参照こと。

15) ここでさきに述べた古典期(1-3世紀)以降の韻律も列挙されるから,少なくともこの部分は成立が降ることがわかる。

16) *TP* 1は「kaikkiḷai に始まり,peruntiṇai に終わる7つの tiṇai が,恋愛文学における tiṇai である」と言っているから,*TP* 486が,この *TP* 1を受けて,恋愛文学の tiṇai について言っているのは明らかである。

TP 488：karpu(結婚後の愛)を構成する主要テーマ

TP 489：kaikōḷ(字義,「行為の連なり」)は,これらkaḷavuとkarpu[の一連の行い]とからなる

TP 490：kaḷavuで「発話者(kūrru)[17]」となる6者

TP 491：karpuで「発話者」となる12者

TP 492-496：「発話者」に関する補足

TP 497-501：恋愛文学における「対話者(発話者が語りかける相手)」

詳述は避けるがここに現れた用語は,tiṇai以外はすべて恋愛文学の述語で,英雄文学にはなんら意味を持たない用語である。

ところが中世の注釈者Pērāciriyar(14世紀)は,*TP* 486が英雄文学のtiṇaiにも暗に言及しているし,*TP* 489のkaikōḷも英雄文学における諸々の行為を含んだ言い方であると言う。仮に英雄文学のtiṇaiやkaikōḷ(英雄文学でkaikōḷという述語はないが)にも作者が言及するつもりであったなら,恋愛文学で対をなすkaḷavu-karpuを,*TP* 488-489,*TP* 490-491と併置した様に,恋愛文学のtiṇaiと英雄文学のtiṇaiとを*TP* 486と**TP* 487と併記しているはずであるし,kaikōḷに関しても*TP* 489,**TP* 490と並べて述べられてるはずである。

このように考えると伝統的な解釈はやはり成り立たず,第8節は,英雄文学の作詩法にまったく言及していないと取らざるを得ない。しかしそうなると*Purattiṇaiyiyal*が現在の場所,すなわち第2節に初めからあったとしたなら,作詩の技法についいての規定を列挙する*TP*の第8節で,英雄文学の作詩法についてただの一つのスートラも割いていないのはおかしいことになる。

従って,第2節*Purattiṇaiyiyal*は初めから現在の位置にあったのではなく,他の節よりも後に書かれ,後になって第1節の*Akattiṇaiyiyal*と対をなすように,現在の位置に入れられたと考えて間違い無いであろう。その*Purattiṇaiyiyal*にサンスクリット的な要素が少ないのは,その内容が純粋にタミル的であるからで,その成立が早いとか遅いとかということとはこの場合関係が無いのである。

以上のことから,*TP*が次の3つの層からなると言えるであろう。

(1)古層：第1節*Akattiṇaiyiyal*,第3節*Kaḷaviyal*,第4節*Karpiyal*,第5節*Poruḷiyal*。但しこれらから後の付加,挿入部分を除く。

---

17) 「発話者(kūrru)」および対話者については,注12参照のこと。

(2)新層—Ⅰ：a)サンスクリット文化の影響の濃い節(第6節 *Meyppāṭṭiyal* および第7節 *Uvamaiyiyal*)

b)タミル的なもの(第8節 *Ceyyuḷiyal* 及び第9節 *Marapiyal*)

(3)新層—Ⅱ：*Puṟattiṇaiyiyal*

おわりに

Ⅰ-1およびⅠ-2で, *Tol.* の第1章, 第2章がおおよそ紀元1世紀から3世紀の間に成立したと述べた。また上に述べた *TP* の古層の成立が紀元2-4世紀ごろであることについてはⅠ-3でみた。これらの後に *TP* の新しい層が著され, さらにその後に, *TP* の各節をつなげるためのスートラが(例, *TP* 52-58, *TP* 140-143など), 最終編集者によって付け加えられたと考えられる[18]。

では, *Tol.* の1, 2章の作者と *TP* の古層との作者が同じかどうか, *TP* の新層には何人の作者が関わり, それらの作者と最終編者との関係はどうなっているか(最終編者はそれらの作者の一人かどうか), *Tol.* の古い層の作者[達]と新しい層の作者[達]との関係は何か(例えば同じ学派の者)など, 詳しいことは分からない。すべて今後の課題である。

TP の新層の年代についても確実なことは分からない。ただそこに用いられている言語, 記述内容, 他の文献や資料との比較年代から, 4世紀から6世紀の間に成立したと考えて間違い無い。従って *Tol.* の年代は, 以下のようにまとめることが出来るであろう。

Ⅰ.	1. *Tol.* の第1, 2章	紀元1-3世紀
	2. *Tol.* 第3章の1, 3, 4, 5の各節	紀元2-4世紀
Ⅱ.	*Tol.* 第3章の2, 6, 7, 8, 9の各節	紀元4-6世紀

18) 今日に伝わるテキストには, この最終編纂の後にも, さらにスートラの付加, 紛失があったと思われる。例えば *TP* 38-45では, 別れというテーマに関して, 女の母親, 女の友人, 男などが発話する場合を列挙するが, 重要な登場人物である「女」の発話する場合に付いては記述が無い。Iḷampūraṇar の述べるごとく(*TP* 45, 注釈), 女の発話する内容を記したスートラが紛失したのであろう。また *TP* 178では,「前に述べた2種」と言うが, その「2種」に当たるものは, *TP* 178の近くのスートラには見あたらない。Iḷampūraṇar は遙か以前のスートラ *TP* 44：22-3に, その「2種」を求めるが, それに言及するスートラは *TP* 178の直前または少し前にあったが, 後に紛失したとみるべきである。

Ⅲ. *Tol.* の最終編纂 紀元 4 - 6 世紀

(付記 本稿は Takahashi 1989 で扱った内容の一部を,書き改めたものである)

略語表

DEDR	*A Dravidian Etymological Dictionary (Second Edition)*, by T. Burrow and M.B. Emeneau, Oxford, 1984.
Skt.	Sanskrit
Tol.	*Tolkāppiyam*
Tol. Col.	*Tolkāppiyam Collatikāram*, with an old commentary by Cēnāvaraiyar.
Tol. Eḻuttu.	*Tolkāppiyam Eḻuttatikāram*, with an old commentary by Iḷampūraṇar.
TP	*Tolkāppiyam Poruṭikāram*, with an old commentary by Iḷampūraṇar.

参考文献

Aravamuthan, T.G.

1930 The Oldest Account of the Tamil Academies, *Journal of Oriental Research*, 6, Madras.

Chelvanayakam, V.

1969 Some Problems in the Study of Tolkāppiyam in Relation to Sangam Poetry, *Proceedings of the First International Conference Seminor of Tamil Studies*, 2, Kuala Lumpur.

Gros, Francois

1975 The Smile of Murugan by Kamil Zvelebil (Book Review), *International Journal of Dravidian Linguistics*, 4(1), Trivandrum.

Hart, George

1975 *The Poems of Ancient Tamil, Their Milieu and Their Sanskrit Counterparts*, Berkeley.

Ilakkuvanar, S.

1963 *Tholkāppiyam in English, with Critical Studies*, Kural Neri Publishing House, Madurai.

Jesudasan, C. and H.

1961 *A History of Tamil literature*, Y.M.C.A Publishing House, Calcutta.

Mahadevan, Iravatham

1970 *Tamil-Brahmi Inscriptions*, The State Department of Arhchaeology, Government of Tamilnadu.

1971 Tamil-Brahmi Inscriptions of the Sangam Age, *Proceedings of the Second International Conference Seminor of Tamil Studies*, 1, Madras.

Marr, J.R.

1985 *The Eight Anthologies - A Study in Early Tamil Literature*, Institute of Asian Studiess, Madras.

Meenakshisundaran, T.P.

1965 *A History of Tamil Language*, Deccan College, Poona.

Murdoch, John

1865 *Classified Catalogue of Tamil Printed Books, with Introductory Notices*, The Christian Vernacular Education Society, Madras.

Natarajan, T.

1977 *The language of Sangam Literature and Tolkāppiyam*, Madurai Publishing House, Madurai.

Nilakanta Sastri, K.A.(ed.)

1957 *A Comprehensive History of India, Vol.II-The Mauryas & Satavahanas*, 325 *B.C. - A D.* 300, Orient Longmans, Bombay/Calcutta/Madras.

高橋　孝信

1984 タミル古典文学の基礎的研究-恋愛文学の術語：*Kuruntokai* の詞書から,『西南アジア研究』, 23, 京都.

Takahashi, Takanobu

1989 *Poetry and Poetics : Literary Conventions of Tamil Love Poetry*, Unpublished doctoral dissertation at the University of Utrecht.

Vaiyapuri Pillai, S.

1956 *History of Tamil Language and Literature-Beginning to* 1000 *A,D.*, New Century Book House, Madras.

Zvelebil, Kamil V.

1973a *The Smile of Murugan-on Tamil Literature of South India*, Leiden.

1973b The Earliest Account of the Tamil Academies, *IIJ*, 15, Leiden.

1975 *Tamil Literature* (*Handbuch der Orientalistik, Zweite Abteilung*, 2. *Band*, 1. *Abschnitt*), Leiden.